

男爵令嬢のまつたり 節約ごはん①

たかたちひろ
Chihiro Takata

Regina
BUNCO

登場人物紹介



目次

男爵令嬢のまつたり節約ごはん 1

書き下ろし番外編
じはんじいろ・ベリーハウスの迷い猫

男爵令嬢のまつたり節約ごはん
1

第一章 婚約破棄は、夢の始まり？

夕暮れ時、伯爵家に相応しい豪奢な屋敷の大広間には、屋敷に勤務するメイドや執事といった使用人が一堂に会していた。理由は告げられずに集められたらしく、何事かと騒ぎ合う者もいる。

その中心にいるのが私、アメリカ・ローズベリーと、その婚約者であるスペンス・グレイだ。

私も、スペンスから呼び出されただけなので、これからなにが起ころるかは知らされていない。だが、よくないことが始まろうとしているのは、彼の態度から明らかだつた。彼の視線は宙をさまよい、言い出しづらいことでもあるのか口はもごもごしている。

焦れつた空気が立ち込める中、それは絞り出すようにして告げられた。

「アメリカ・ローズベリー。君との婚約は今日限りで破棄させてもらいたい！」

その言葉は、場の空気を凍りつかせる。

（

だが状況を理解する者が増えていくにつれ、ざわめきが広がつた。
その、さなか。

当事者たる私、アメリカ・ローズベリーは黙することしかできなかつた。
寝耳に水、まつたくもつて突然の話——かといえば、違う。
言葉にはされども、知つていた。

遠からず今日という日を迎えるだろうことを。

「い、今まで言えずにいて、本当に申し訳ない。どうしても僕は、ハウスメイドのサリと一緒になりたいんだつ。実は四年前、十八の頃から、ひつそりと交際していた。婚約者の君には障りがあると思って、伝えられなかつたんだ……」

ええ、知つていましたとも。

メイドと関係を持つっていたことも、ばっかり把握していました。

なにせ、この人は態度に出やすい。四年前のある日を境に、私への接し方が雑になり、

私との会話も、その頃から減り始めた。懸命に話題を提供しても、彼はつまらなそう

に流すだけで、すぐにやりとりが終わってしまう。

「返事をくれないか。……僕は、君との婚約を続ける気はない。き、君はそれについてどう思う？」

中途半端な物言いが、彼らしい。

スペンスはとにかく優柔不断なのだ。

いつそ感心してしまうほど些細なことまで、それは一貫している。

食事の席でも、メインを肉か魚か決められない。贈りものを買いに街へ出ても、迷った挙句、結局なにも買わずに帰ってくる。

それは私との婚約においても同じだった。

その曖昧さに振り回されて、婚約状態のまま結婚までは至らず早五年。

気づけば、私は二十二歳になっていた。十五で貴族学校を出たら、すぐに結婚する者もいるような国である。貴族令嬢は遅くとも、十代のうちに婚姻を結ぶことが一般的とされているから、普通では考えられないほどに遅い。

今振り返れば、もつたいない時間だったなと思う。こうして耐えてきた苦労が水の泡になるのだから。

正直、こうなったときの予行演習は既に済んでいた。

返事は決まっている。どうせ、私には選択肢なんてない。

我がローズベリー家は、貴族としては最下級にあたる男爵家。一方のグレイ家は、代々王の側近を務める伯爵家。

元々、今回の婚約は、ローズベリー家から働きかけ、こちらが持参金を用意する形で成立した。

たぶん家の将来を考えてのことだ。グレイ家の後ろ盾を得られれば、少なくともローズベリー家が潰れることはなくなる。そしてまた、私の生活だつて裕福になる。

そう両親は考えてくれたのだろう。

だから、どんなに不満があるうと表に出してはいけない。その気になれば彼らは、ローズベリー家を潰すこともできるのだ。

「……わかりました。婚約破棄を受け入れます」

私に集まっていた視線が、その一言でスペンスに向かう。

同時に件のメイド、サリさんが飛び出してきた。一応、私も面識があつたが……彼女は脇目も振らずスペンスへと一直線、二人は抱擁を交わす。

麗しい瞬間なのだろう。

きが豊満である。

たぶんスペンスは、あれにやられたのだろう。ちなみに私は、平均的な体形で、どちらかといえば、すとんとしている。

とはいえたゞらしく、お手入れはきちんとしてきたつもりだ。

どうせならスペンス好みの女性になろうと努力だつてした。

今や胸元まで伸びた銀色の髪は毎日丁寧にとかして、つやつやしている。服だつて元は水色を好んでいたのを、赤系の色を着るように変えた。それらは全て、舞踏会などで彼が目を惹かれていた女性を真似たものだ。

得意の料理を差し入れしたことだつて何度もある。

それでも、私は彼女に敵わなかつた。努力で埋められる差ではなかつたということだろう。

「りよ、両親は必ず説得してみせるよ……！だから、サリ。僕と一緒になつてほしい」

「若様、ああ、なんて頼もしい。期待してお待ちしております」

「ああ、サリ。その言葉だけで頑張れる気がしてきたよ。幸い、僕は三男だ。あとを継ぐこともないから、きっと大丈夫だ」

愛の言葉が、そしてキスが交わされる。

さつきまでの戸惑いはどこへやら、大広間には祝福のムードが漂つていた。

そもそもここはグレイ家だ。私の味方をしてくれる人は、いない。私のいる場所だけ、ハサミで切り取られているみたいだ。

窓の外から差し込む夕日さえも、きらきらと二人を照らし、その愛を祝福するかのようだ。

どうせならもつと早くに、その格好いいセリフを吐いてくれればよかつたのに。

なんで、今なのだろう。私の五年は悼んでも惜しんでももう戻らないのに。

私はひつそり、下唇を噛んだ。

ポケットに入っていた魔石のお守りを握りしめる。

ふと、サリさんがこちらを見ていることに気づいた。勝ち誇ったような笑みが、一瞬向けられる。

もう私にできるのは、引っ込むことだけのようだ。

夕焼けの作る影に紛れるようにして、私はグレイ家をあとにした。

外で待たせていた馬車に乗り込み、帰路に就く。

屋敷の中での出来事は、なんらかの形で外にも伝わっていたのかもしれない。

従者の青年は、いつもは気安く話す仲なのに、今は俯き黙り込んでいた。

「これ、一緒に食べない? ちょっと小腹が空いたの」

だから、私のほうから話しかける。そして鞄から出したクッキーを、彼の膝に置いた。

「……お嬢様、あなたは本当に素晴らしい方です。でも、こんなときまで私のような者

を気にかけてくださらなくとも」

「大丈夫よ。単におやつに付き合ってほしかつただけだわ」

私の手作り。それも今日のクッキーは、自信を持っているレパートリーの一つだ。くるみを粗く碎いて生地にませることで、さっくりした食感を生み出した。オレンジの摺り下ろしが演出する酸味も、ほどよいアクセントになっている。端をかじつただけで香ばしい匂いが鼻を抜け、舌に残るのは柑橘系の爽やかな後味。

「うん、我ながら時間が経つても香ばしいわね」

「はい、とても」

本当は、スペインへの差し入れにするつもりだったのだ。昔、彼が褒めてくれたことがあるものだったが、こんな事態になつた。

投げつけてきてもよかつたかな。

なんて思わなくもなかつたけれど、食べ物に罪はない。粗末にするなんてもつてのほ

かだ。

そうして即席のティータイムで気を紛らわせているうちに、家に着いた。

所詮は男爵家。グレイ家のよう広くはない。私は門をくぐると、屋敷に入り、まつすぐ両親の部屋へと向かった。

言いにくしながら、ありのままを伝えると――

「……なんだって!? 婚約破棄!!」

父が驚いて大きな声をあげる。

母が動搖したように、口を手で覆つた。

スペインとの仲がうまくいっていないことは、話していなかつた。

メイドにうつつを抜かされているなど、口が裂けても言えず……。今日の呼び出しあも、

両親は、そろそろ結婚話かしら? なんて呑気に言つていたのだ。

「ごめんなさい、お父様、お母様。私が不甲斐ないばかりに……、せつかくのいいお話を

でしたのに」

顔を上げられなかつた。

格上の伯爵家との縁談が決まつたとき、両親は大いに喜んだ。

私は散々時間をかけた拳銃、その期待を裏切つてしまつた形になる。五年かけたのに

結局ぬか喜びだなんて、そういうない話だ。

氣落ちする私のそばに来て、母は優しく背中を撫でてくれた。その瞬間、必死に閉じていた感情の蓋が開いた。これまで堪えてきたものが一斉にこみ上げてくる。

床に、ぽつりと零レザが落ちた。それから、つい泣いてしまう。

スパンスへの想いからではなく、ただ自分の不甲斐なさに涙が止まらなかつた。やつと泣きやんで、しばらく放心したあと、私は口を開いた。

「私、これからどうしようかしら」

掠れ声になつてしまつた。気持ちを立て直そうと、きちんと声を出し直す。

「たぶん、もう縁談の話はこないわ。年齢が年齢なもの。これじゃあローズベリー家の役に立てない」

「そもそも待たせた挙句、婚約破棄なんて仕打ちをするような男と婚約させた私が悪いのだ」

「そうよ、気にしなくていいのよ、アメリカ。家のことはいいから、したいようになさい。この家に残つてもいいのだし」

両親二人の言葉は、優しくて甘かつた。本当に、私のことを大切に思つてくれている

のだろう。

けれど、現実はうつてかわつて苦い。

このまま私が家に残れば、外聞が悪いことこの上ない。二十代の未婚令嬢がいるなんて、かつこうの噂の種になる。

さらに言うなら、グレイ家から、「そもそも浮気されるような至らない女をよこすのが悪い」などと難癖をつけられ、ローズベリー家が攻撃される可能性だつてある。

先手を打つて裁判で慰謝料の請求をしたところで、勝てるとは限らない。家格の差は、信用の差そのもの。そんな博打ばくちを打つて、家督を継ぐ予定である弟のアーサーに、万が一にも迷惑をかけたくなかった。

「姉さん、話は聞いたよ」

ちょうど、その弟——アーサーが入つてきた。

彼は十八歳で、私とは年齢が離れている。そして、ひいきめぬ聰明目抜きに、かなりの美形だ。私と同じ銀色の髪を、前髪だけかき上げて耳元でまとめていた。それが色っぽいのだと、貴族の令嬢たちからの評判も上々なのだけど——

「姉さんのことは僕が守るさ。任せてください。姉さんのそばを片時も離れません」

残念ながら、やや姉離れできていない。基本的にとても心配性で、寂しがり屋で、私

にべつたりだ。私にしてみれば、あるのは色氣ではなく、幼氣いなげである。

でも、そんな弟だからこそ可愛く思うし、守つてあげたい。

「ありがとう、アーサー。——少し考える時間をくださいな。お父様、お母様」

「ああ、結論を急ぐことはないさ」

「ええ、もちろんですよ」

ひとまず保留にして、話を終える。

それでもなお、重く垂れ込めるような空気が部屋には漂っていた。

しんと静まり返ると、スペンスたちの楽しげな声が聞こえてくるような気がする。それを打ち払うかのごとく、私はパンッと両手を叩いた。

「そうだ。ごはんにしましょう、お母様、お父様、アーサー。こんなときこそ食べて元気を出しますわ」

戸惑い半分、気遣い半分——そんな表情で三人がやや遅れて頷くのを見て、席を立つ。「では、少しお待ちくださいな」

部屋を出て向かったのは、廊下の先にある厨房ちゅうばうだ。

入ってすぐのところで、ハンガーにかけていたエプロンを巻く。

我がローズベリー家は、贅沢ぜいたくできるほどのお金を持っておらず、雇つている使用者の

数も少ない。しかも私の婚約のために貯蓄もはたいてしまった。そのため家事全般を使用人に任せて、悠々自適ゆうゆうじてきに暮らすだなんて夢のまた夢だ。

「みんな、今日は鶏の照り焼きをメインにするわよ。まず薄く叩いて、フォークで穴を開けましょ」

そんなわけで、私がメイドたちと一緒に、料理を作つてゐる。

自分で肉を切り、魚をしめる令嬢。もしグレイ家に嫁いでいたなら、はしたない、と叱られたかもしれない。

けれど、これが私にとっての当たり前だ。

貴族の家に生まれたのに、こうして厨房ちゅうばうに入れてもらえていることに、むしろ感謝さえしている。

私は早速、両手を合わせて目を閉じた。念を込めるが、指先がほのかな温もりに包まれる。

「アメ。今日は一段と気合入つてるね？」

舌つ足らずの声でそう言うのは、召喚精靈獸のモモだ。雪のように真っ白な身体に、長く垂れた尻尾が可愛い。

その姿は大そのものなのだが、そう言つと彼はきまつて、「ボクは、もつと神聖な存在だよ！」と憤る。でも、肉球もあるし……と思うが、あんまりしつこく言うのはご法度だ。

実際、精靈獣は希少な存在らしい。魔法を使える貴族たちの中でも、召喚できる者はほんの一握りだ。

かくいう私も、自分以外の召喚士に出会ったことがない。

幻の存在ともいえる、精靈獣。その中でもたぶん、モモはかなり変わっている。

今から十年ほど前、お料理の最中に魔法を使つていると、忽然と現れ、味見を始めたのだ。以来、私になつて、呼び出すと来てくれるようになった。

そんな彼だから、その能力も風変わりだ。

「今日のメインは、なにになに？」チキンか、「いいね、ボクも好きだよ」

「そ。色々あつたから、今日は照り焼きでこつてりいきたい気分だわ」

「だったら、ボクにお任せ！」

モモは前脚をくいくいと数回搔く。

すると、調理台の上に透明な小皿が数枚、どこからともなく現れた。

「濃口醤油、砂糖、酒、つてところかな？ 辛味が欲しいときのために柚子胡椒も出しておいたよ」

これこそ、たぶんこの世に二つとない、モモの特殊技——【調味料生成】だ。

彼は、料理に必要な調味料を作り出すことができるのだ。

しかもモモ曰く、彼が知るものならことは別の世界のものまで、なんでも生成することができるらしい。

生成の際には、多少私の魔力を必要とするが、たいした負担ではないし、モモは調味料を提供してくれるだけでなく、様々な料理方法も教えてくれる。

実際この照り焼きは、彼に教わるまで知らなかつた。さらに言うと、醤油という万能調味料も、この国にはなかつたものだ。

調理を終えて、食事の時間になる。

モモの調味料のおかげもあって、今日も原価は安いながらも、満足のいく食事をとることができた。

ああ、こんなときでも、ごはんは美味しいのだ。

その幸せを味わううちに、私の心は決まった。

「私、家を出てごはん屋さんを始めたいわっ！」

「ね、姉さん？」
い、い、家を出る!」

ええ、そうよ。遠い街に行くのがいいかしら。

どうしてだい？ 料理店なら、別にここに残つてもいいじやないか。そもそもそん

なことをしなくても、姉さんの面倒は僕が見るし——

ううん、それじゃあ意味がないわ。家を出ないと迷惑をかけるもの。それに昔から

自分でお店を持つてみたいと思ってたの！」

私はまた見ぬ我が家に思いを馳せて拳を握る。

なんだから

母が、若干呆れ気味に、でも仕方なさそうに笑った。

結局、頭を冷やしても、私の考えは変わらなかつた。

一ヶ月後、私は屋敷を旅立つ日を迎えていた。

卷之三

「そうはいかないわよ。もう馬車の手配は済んでるし、店だつて見繕みつらつてあるんだから

でも、でも、と整った顔が台無しになるほど、アーサーは不安そうにしている。こうしている姿は、小さな頃とまったく変わらない。

彼はまだ、私の後ろをついてくるだけの気配

私は、その白い額を人差し指で軽く弾いた。

いわ

「姉さんの帰つてくる家、か……。
わかつたよ」

りがたいことだ

感謝してもし尽くせない。彼がいたことで、辛いときも笑顔になれた。

それはもちろん、両親やメイド、執事たちも同じだ。屋敷のエントランスで、勢揃いした面々と少しずつ言葉を交わす。

「これからお嬢様と一緒に料理ができないなんて、とても残念です」

「ありがとうございます。でも、調味料はモモにできる限り生成してもらつて置いてあるから。あなたたちなら、私がいなくともきっと、素敵なごはんを作れるわ。もし在庫が切れたら、呼んでちょうだい?」

調理場担当のメイドたちとは、最後の最後まで料理談義に花が咲いた。

レシピを聞かれてその場で教えたりしているうちに、出発時刻が迫る。

最後に、両親と正面から向き合つた。

「この度は、私の勝手を許してくださいて、ありがとうございます」

今回の決断にあたつて、背中を押してくれたのは両親だ。

いかに希望したとて、家の方針があるならば従わざるを得ない。それなのに、我が家を出るのを認めてくれた。決して余裕があるわけではないのに、店の支度金まで捻出ねんしゅつしてくれるなど、至れり尽くせりである。

「堅苦しいですよ、アメリカ」

「そうだぞ。娘にこれくらいできなくては、貴族は務まらないよ」

なんて温かい家族なかしら。ここにきて改めて胸が熱くなる。

「この恩は必ずお返しします！ お金も、必ずや」

「だから、堅苦しいですよ」

そうこうしていたら、門の外で馬のいななく声がした。迎えが到着したようだ。扉を使用者たちに開けてもらう。

「では、お父様、お母様、アーサー、皆さん。またお会いできることを楽しみにしていきます」

最後くらいは令嬢らしく、と幾重にもレースの重なつたスカートをつまみあげ、腰を落とした。

名残惜しさはあるけれど、そこからはもう振り返らずに馬車に乗り込む。

馬車が動き出してもしばらくは、アーサーが「姉さん」と連呼する声がこだまのようになに聞こえていた。それが聞こえなくなつたら、いよいよ一人になつたのだと実感する。

いつもついてきてくれていた従者の青年もいない、自分だけの片道旅の始まりだ。私は窓から外を覗く。雲一つない空からは太陽が惜しみなく日差しを注いでいて、視界は良好だ。

景色が美しく見える理由は、天気だけじゃない。

とし、前髪も短くして流すようなスタイルに変えたのだ。

この先、彼の気持ちや反応をいちいち窺って、不必要に落ち込むこともない。そう思うと、気分がぐんと上がってくる。それになんといつても、叶わないと思っていた夢に手が届くのだ。

そう、自分の店を持てる！

貴族のしがらみから離れて、料理に目一杯精を出せる。

こんなに素敵なことって、他にあるだろうか。

どうせ時は戻らないのだし、いつまでも、くよくよしていたらもつたない。

私は春の空気で胸を膨らませ、精靈獣召喚の魔法を発動する。

「ずいぶん機嫌よさそうだね、アメ」

「おはよう、モモ。そりゃあ、今日から料理三昧だもの。嬉しくないわけがないわ」

「そうだね。アメが料理に専念してくれるのは、ボクも嬉しいや。それにしても、アメ。あの日、婚約破棄されたこと、なんでボクに言ってくれなかつたんだい？」

「言つたら、辛氣臭い気持ちになるでしょ？ 料理人がそれじや、味までおかしくなつちやう」

モモとの交流を楽しみながらの旅路。

馬車は、私たちを新しい場所へと連れていく。

途中の街で宿を取りつつ、計三日ほど揺られた頃、視界の端に青が映つた。

「海よ、モモ！ あれが噂の海よ！」

「ボクは知ってるよ。別の世界で見てきたからね。アメは初めて見たんだね？」

「ううん、もう何度か見てるわ。でも、何度も美しいのよね。広い！ 終わりがまったく見えないわ」

店の下見に来たときも目にしていたが、まだまだ心が躍る感覺は健在だ。

ローズベリー家の領地は内陸部にある。

私は社交以外で領外出ることはあまりなかつたし、海までは距離もあつたから、滅

多にお目にかかるなかつたのだ。

憧れだった景色がすぐそこに広がっている。

ということは、この旅の終わりが近づいているということだった。

海沿いの街、口コロ。そこが、私の新たな拠点だ。

街の関所を通過すると、白壁の三角屋根の建物がずらり並ぶ光景が目に飛び込んできた。

「森」と呼ばれる魔物の出る森もあるそうで、狩り場にする冒險者さんもこの街に多く滞在しているらしい。

農業もさかんだし、小さな港もあって人の往来も多い。これらの点はもちろん下調べ済みだ。むしろその点に惹かれて、この街を選んだのだ。期待どおり、道ゆく人の顔は生き生きしている。

踊る心に任せて観察をしていると、馬車は裏路地に入った。

さらに折れて、下つて、と進むうちに人気はなくなり、道も細くなり組んでいく。少しして馬車が止まる。私は外に出て目の前の建物を見つめた。

「…………アメ、この家で本当に大丈夫？」

「改めて見ると、我ながら心配になるわね。たなす綺麗な表通りを見たあとだと余計ね」

ひつそりした裏路地に佇む、中古のボロ屋。

そこが、私の拠点となる料理屋だった。

一応、悪意を持った侵入者は追い払えるよう、有事のための結界魔石は用意してある。安全なはずだが、改めてこの外觀を見ると、さすがに少し怖気づいてしまう。

さんさんと降り注ぐ太陽も、ここまでほとんど届かない。

事前に確認もしたが、真昼間でも採光は最低限なのだ。

そこが、私の拠点となる料理屋だった。

言い訳をさせて？ 決して、両親にもらったお金が少なすぎたわけではないの。

……ただ、調理器具を作つてもらうのに、お金をかけすぎた。

モモの知識をもとに、オープンやら魔法コンロやら、元々高価な道具たちに、さらに新たな機能を加える形で魔導具職人に特注したせいだ。

あつという間に、予算いっぱいになってしまった。

そんなことを思い出しながら新しい家（中古築深だけれど）兼、店の前で、私は深呼吸をする。

「じゃあモモ、今日から二人……えっと一人と一匹になるけど、改めてよろしくね」

「こちらこそだよ、アメ。ボクは君の眷属けんぞくみたいなもの、どこまでも君についていくだけさ。アメは可愛いし、器量もいいし、世界一の料理人になれる素質もあるしね」

「それは褒めすぎよ。私はちょっと料理が好きなだけ」

「いいや、嘘は一つも言つてないよ。これまで散々耐えてきたんだ、アメは幸せになるべきさ」

モモは私の肩に前脚をかけ、後ろ脚をうまいこと折つて、ふわりと乗る。

鼻を寄せられたので、信頼の証あかしかしらと嬉しくなり、頬ずりを返した。

まるで綿毛のように、ふわっふわの毛だ。お手軽に幸せ気分になれる。

それでしばらく肉球をフニフニさせてもらつたり、戯れたりした。
満足したのち、家に入った私は荷ほどきを始める。そして、あるものを引っ張り出し、扉の外に吊り下げに行く。

店の目印であり、象徴となる看板だ。

そこには、大きな字で店の名前『はんごころ・ベリーハウス』と記されている。そして、その横に、『安くて美味しい超お得料理、ご用意しています』と書いた。

節約により値段を抑えた料理。これが、この店の要だ。

張り切つてお洒落な店にするより、慣れているものを売りにしたほうがうまくいくだろうという考えだった。

嵩^{かさ}を増したり、材料を安いもので代用したり、裏技を使つたり——実家の厳しい財布事情もあって、『節約ごはん』はお手の物なのだ。

そうして安価で提供することで、たくさん的人に来てもらいたい——そんな思いもあつた。

さらに、珍しいコンセプトで話題になりやすいのではという戦略的な思惑もある。

看板を色々な角度から見つめたあと、私は両方の拳を握りしめた。

「あー、盛り上がってきたかも！ 早くごはん作りたい！」

「アメつたら。まだ開店日じゃないのに、気が早いよ」
「いいのよ。それだけやる気になつているつてことなんだから」
さて、ここからが始まりだ。

新しい街で、新しい私として、誰もが羨^{うらや}むような素敵^{すば}な生活を送つてやる！



それから私は、くる日もくる日も開店準備に励んだ。

といつても、調理器具や家具などは既に届けてもらつていたし、下見の際にある程度の配置も決めてあつたので、一週間ほどで、用意は終わつた。

一人だけの生活にも慣れてきて、いよいよ大詰め。

開店を明日に控えた夜のことであつた。

「わっ、綺麗な顔……」

つい、眩いてから慌てて口を押さえる。

店の外観を再度確認しようと外に出たとき、一人の男性に出会つたのだ。

よくできた彫刻みたいだ——そう思つた。それもたぶん貴族の家の保管庫に大事に

仕舞われる、一級品。公開されようものなら、たちまちみんなの話題をさらうだらう彫刻だ。

それくらい、揺るぎない美しさだった。

地味な黒の服を着っていても、それは決して褪せない。

神様が描いたとしか思えないほど絶妙な輪郭と、そこに収まるキリリとした相貌、青みがかった海のような色の髪。若干、強面にも見えるが、そこを含めて完成されている。さらに、細身ながらも高身長だ。私より、頭二つ分くらいは高い。

彼ほどの美形には、これまで幾度となく参加してきた貴族たちの社交の場でも、出会ったことがない。

そんな美しい男の人が、なぜか私の店の前で立ち尽くしている。

どうしたんだろう、と首を傾げた瞬間、がさりという音を立てて、彼は視界から消えた。

「……え？」

慌ててあたりを見回すと、なんと彼が地面に崩れ落ちているではないか。

意表をつかれた私は、遅れて腰を下ろし彼の肩を揺する。

その際、つい彼の顔をまじまじと覗き込んでしまって、ちょっと息が止まつた。

間近で見た顔が、あまりに綺麗すぎたのだ。

いや、今は見惚れている場合じゃない。

「あの、大丈夫でしようか。お熱？」

声をかけて、額に手を当てる。

体温を測ろうとしたとき、それは鳴り響いた。

ぐうぐう、と緊迫感とは無縁の音が。

……どうやらお腹の減りすぎで、倒れたらしい。

拍子抜けするが、とりあえずは一安心だ。

そして思わず、笑みを零してしまった。空腹ならば、いくらでも力になつてあげられる。むしろ私の本分だ。

どうやら意識はあるらしいその殿方が起き上がるのを待つて、私は声をかける。

「よっぽどお腹が空いてるみたいですね」
「……君は、俺のことが怖くないのか」

「ええ、全然怖くないですけど」

よくわからないことを言うものだ。空腹で倒れている人のなにに恐怖を感じろと？
ただただ心配なだけである。

「ごはんをお出しますわ。とりあえず、中へどうぞ」

私はなからば強引に、彼を店に押し込んだ。

内部は、明日の開店に備えてバッチャリ清掃済み。

とはいえ、店内を他の人に見せるのは初めてだ。若干こそばゆい気持ちになるけれど、すぐに、そんな場合じやなかつたと氣を引き締める。

男性をカウンター席に通し、私は厨房へ急ぐ。

仕込みを済ませていた材料の中からいくつかを選び、早速調理を始めた。

極限までお腹を空かせた人がそこにいる。

ならば、できるだけ簡単に、そして素早くできるものがいい。

魔石を使って作つてもらつた魔導コンロに、火をつける。

その上でスキレットを熱したら、まずはごま油。次いで玉ねぎ、ニンニクと入れて、強火で炒めていく。それがあめ色に染まつたところで、燻製鶏肉などの食材を追加した。

今回の節約は、ここが要だ。これらの食材、実は他の料理に使つた材料の切れ端なのだ。残つた切れ端をみじん切りにして使うことで、無駄な廃棄を減らし、かつ原価を抑えるわけである。

準備が整つたところで、主役のお米を投入。

炊いて、お夜食用に取つておいた分が、まだ残つていたのだ。

さらに、足元の箱を開ける。中からひんやりとした空気が溢れて、足首を撫でた。魔石の力によつて、内部を一定の温度に保つ便利道具、冷却箱だ。多少値は張るが、これも必需品である。

取り出したのは、鶏卵だ。

卵をホイップバーで軽く溶いてスキレットに流し入れれば、そこからは速さ勝負。煙とともに厨房に立ち込める香りを堪能しながら、スキレットを何度も揺する。

全体が黄金色に輝き出したら、仕上げは万能調味料のお醤油で。個人的な好みで、甘めのものを使う。

スキレットの縁からかけば、じゅうつと快感さえ覚える音と一緒に香ばしい匂いが立つた。心が満たされていくのを感じつつ、料理をおたまの上にかき集め、平皿に返す。付け合わせのステップ、サラダと一緒にお盆にのせ、差し出した。

「どうぞ、お上がりくださいな！」

「こ、これは一体？ 見たこともない料理だが……」

美丈夫は首を傾げる姿さえ絵になる。

そんな彼には不釣り合いな料理かもしれないが、空腹にはもつてこいのはずだ。

この料理も、昔モモに教わった。それ以来、もつとも繰り返し作ってきた料理かもしない。私の大好物もある、一品だ。

「チャーハンです。ニンニクを炒めて香りの移ったごま油が、卵とお米を包んで……。なんといってもこの食欲をそそる香りが絶品で、具材を変えて面白いんですけど、やっぱり基本は——」

あら、いけない。おしゃべりがすぎてしまった。

料理にも、お客様にも失礼にあたるわ！ それに、チャーハンなんて言つたつて、異世界の料理名なのだから、たぶん呪文にしか聞こえない。

「食べれば、きっとわかります。どうぞ、冷めないうちにお召し上がりください」「だ、だが！ 俺はまだ料金も払っていないし、細かな身銭は別の者に持たせているのだが……」

困惑した顔になる、美丈夫。

お腹が空いて倒れるくらいだから、普段の暮らしある苦しいだろうに、この礼儀正しさだ。

うん、同じ貧乏人として、ますます放つてはおけない。

「お金なら心配いりません。無料で結構ですから」

「……しかし民からこのような施しを、受けるわけには

「施しではありません。このお店、実は明日オープンなんですけど、事前に仮開店をしたほうがよかつたかしら、なんて思っていたところなんです。おかげで明日のシミュレーションができましたわ」

本当の話である。

モモがいるとはいって、一人で調理、提供、会計までをこなすことができるのか。直前になつて、不安を感じていたから、いい予行演習になつた。

「親切にしていただいたことは、大変ありがたいのだが……。やはり受け取れない」「あ、もしかして毒とか心配していらっしゃる？ それなら、私も同じものを食べますわ。お隣、失礼しても？」

彼が戸惑いつつも頷くので、自分の分もよそつて、席に座る。

安全だと示すためにも、先に一すべい。

「うん、美味しいわね、我ながら！」

空腹というわけでもなかつたのに、もつともつと身体が求め出す。これが、チャーハンの持つ不思議な力だ。

醤油以外に目立った調味料は使わなかつたが、燻製肉の塩気がいい仕事をしてくれていた。

また、お腹の鳴る音がする。

私じゃなく、隣の席からだ。彼は、頑なに手をつけていなかつた。

「どうぞ、遠慮なさらず！」

さあさあ、もう我慢ならないでしょ？ 勝手に唾が湧いてくるでしょ？

私がうずうずしていると、美麗な男性は、躊躇いつつもスプーンを手にする。

「……では、お言葉に甘えて、いただこう」

恐る恐るといった風に口に運んだが、それは一口目だけだった。

「こんな美味しいもの、食べたことがない……」

目を輝かせて、眩くように言う。

「ありがとうございます。ちょっと調味料は凝つてますけど、あとは材料の掛け合わせを少し変えただけですよ」

「掛け合わせ、か。たしかに、米と炒めた卵の料理は目にしたことがない……が、不思議とあとを引く」

そう話す間も、山となつていたチャーハンをみるみるうちに崩していく。

「喉に詰まらせないよう気をつけてくださいね。スープもサラダもありますから」

そう声をかけるが、もう夢中になつていての反応は返つてこなかつた。

大きな男の人が、ごはんを豪快に食らう。

それだけでも素敵なお絵なのに、この寡黙そうな美丈夫が自分の料理の虜になつてくれているというのだから、まさに眼福だ。

にこーっと、にやにやつと、頬が緩んでくる。

「そう見られると……食べにくいのだが」

はつ！ つい見つめすぎてしまつた……。

幸福すぎて、時間の感覚を失つていたようだ。

「し、失礼いたしました！ 他のものも食べてくださいね」

「すまない。普段、野菜はあまり食べないのだ」

「む、偏食ですか。ちゃんととつたほうがいいですよ、お野菜は身体を整えてくれるんですから。それにお肉の旨みを引き立てる役割も——」

つて！ ああ、またやつてしまつた！ これじゃあまるで、子どもを諭す母じやないのつ。

素直に聞いてくれるとは、なんていい人なんでしょう。

しみじみしつつ、私も食べ進める。二人同時に、目の前の皿が空になつた。

「こんなに美味しいものを食べたのは、初めてだ……」

「あら、さつきからそれしか言つてませんよ?」

好評なのは嬉しいけれど、いくらなんでも褒めすぎだ。

空腹すぎて、正確な評価ができていない可能性もある。

この街の人にはどんな味付けが合うのか、引き続き調査がいりそうだ。

「あなたは……店主さんのお名前は?」

「あ。私は、アメリカ・ベリーって言います」

万が一知られていたら困るので、苗字は一部伏せておく。

「アメリカは、ここの中身じゃないだろう。こんな料理、見たこともない。俺は仕事柄、他の地域にもよく行くが、このようなものはどこにも……」

やつぱり、そこは突つ込まれるか。

私はできるだけ平靜を装つて、用意していた言い訳を返す。

「私、とっても田舎の街の出身なんです。そこでは普通に食べられているんですよ」

これ以上を聞かれたら、記憶にございません、で通す予定だ。つまり、設定がガバガ

バなのだけれど……

「そうか。いや、すまなかつた、踏み込んだことを聞いてしまつたこと、お詫びする」

こう素直に謝られるとなんだか胸が痛むが仕方ない。

貴族の出で、妙な精靈獸を召喚できるということは、どうしても伏せておきたかった。そもそも調味料——特に香辛料は、物によつてはかなり高額で取引される。それを生成できると知られれば、変な貴族に目をつけられて商売道具にされないとも限らない。

私は、普通の庶民として人生をやり直したいのだ。

あくまで一般人、ただの料理屋の店主でいたい。

「アメリカ、と言つたな。お詫びと礼を兼ねて、ぜひとも今度、なにか返させていただきたい」

「いえいえ、結構ですよ、これぐらい。ありあわせですし」

「……いや、しかし。そういうわけにはいくまい。与えてもらつたら返すのが当然だ

なおも固辞するが、まだ食い下がられる。

「せめて皿だけでも洗わせてくれないだろうか」

「それも大丈夫です。そこまで含めて、明日のための練習ですから！　店主の務めですよ」

それに、魔法を使えば皿洗いくらい、さくっと終わる。元々不要な手間で、お客の手を煩わせるわけにはいかない。

しばらく同じような問答が続く。

両者変な意地を張り合つての結果は、私の寄り切り、粘り勝ちに終わった。

「また、いらしてください。えっと」

「オスカーだ。また必ず来る」

「ええ、お待ちしています、オスカーサン。あ！　今度はお金をもらいますよ？」

退店の際、私は冗談まじりに言う。

「もちろんだ。金でも、土地でも、好きなものなんでも取らせよう。この家を建て替えるのだって構わない。本当に助かった。そしてなによりとても美味しかった」

オスカーサンは、真顔で言っていたが、建て替えなんて大袈裟だ。

その表情からはまったく読み取れなかつたけれど、どうやら冗談を返してくれたらしい。



お腹を空かせて倒れるような貧乏人でも、心は豊か。なんと素敵なことでしょう！　私も見習わなくては。

私は、彼の後ろ姿を、店の前で見送る。

そこでやつと、お店を開くんだ、という実感が湧いた。充実感たっぷりだ。記念すべ

き最初のお客様が、彼でよかつた。

心待ちにしていた朝のはずだった。

けれど、鏡の前に立つ私は目の下にクマを作った上に髪もぼさぼさ、魂が四分の三ぐら抜けていそうな有様だ。

昨夜はなかなか眠れなかつた。

この一週間、いや、長い間ずっと夢に見続けて、ようやくこぎ着けた開店日だ。

緊張も、興奮もないわけがない。

「アメに付き合つてボクまで寝不足だよ」

「ごめんね、モモ。でも、いてくれてありがとう。おかげで変に悩まずに済んだわ」

ずいぶん遅くに寝て、かなりの早起きをしてしまった。

まだ開店まで時間はあるが、二度寝など到底できそうにない。

私は、モモへのお詫びも兼ねて、とびきりの朝ごはんを用意することにした。どんなメニューにしようかしら。

考えを巡らせながら、朝支度を済ませていく。

着替えて顔を洗つたら、すぐに一階に下りた。

基本的に、二階が居住用で、一階が店舗用と用途は分けてある。

けれど、厨房だけは話が別だ。なんでも揃っているのに、利用しない手はない。

冷却箱の中から野菜を見繕つて、頭の中でレシピを組み上げていく。

「……さすがだね、アメ。これを今考えついたのかい？」

「まあね、でもちょっとしたアレンジよ」

完成させたのは、じやがいもサンドだ。

マッシュしたポテト、茹で卵、チーズを和えた具をたっぷりパンに挟んで、軽くオーブンで焼いたものである。

もちろん、切り落としたパンの耳を捨てるなんてことはしない。カリカリの揚げ焼きにすれば、コーンスープに浸して食べるディップステイツクに大変身だ。

「あつ、髭に少しついてるわよ」

「嘘、ボクとしたことが……！ ど、？ わからないよ」

あとは、簡単なサラダでも作つて添えれば、立派な朝食になる。

「うん、胡椒もよくきいてて美味しいね。これで全回復だよー！」

モモは、小さな身体と比べて、かなり大きいパンをあつという間に胃に収める。調味料生成が特技だけあって、彼は食に目がないのだ。

「あつ、髭に少しついてるわよ」

そしてドジもある。

そんなところも、犬のような姿のせいか、とても愛らしく感じる。

私は布巾を手にして、彼の顔をぬぐう。

ついでに、朝のふかふか時間を堪能させてもらつた。

精霊獣召喚は、なごみみたいときにも有用な魔法だ。まだまだ時間は余っていたので、膝に乗せて櫛で毛並みを整える。

そのうちに、私も元気が出てきた。

鏡でよくなつた顔色を確認してから、開店準備に取りかかる。

開店時刻の少し前、私はもう堪えきれなくなつた。昼用の『本日のお品書き』を記した板を、持つて外に出る。

店の前に置いた椅子に立て掛けると、ついにその瞬間がきた。

「『ごはんどころ・ベリーハウス』、開店です！」

が――

腰に手を当て堂々宣言した私の声に、誰も応えなかつた。

正確に言うと、店の前の路地には人っ子一人おらず、しーんとしている。

……初日なのに、お客さんが一人もいない？

よくよく考えれば、ありえない話ぢやない。

ここは街の奥まつたところにあるし、店が認知されていない可能性だつて大いにあります！

一度、作戦を立て直す必要があるのかも……

しょぼんとして引き返そうとしたとき、建物の陰に隠れるようにして立つている男の人が目に入った。

その手には、私の作ったチラシがある。

なれば反射的に、私はその人にずいづい近寄つていった。

「もしかして、私のお店に来てくれたんですか？」

「あ、はい、このあたりのお店を巡つてまして……」

「じゃあ、ぜひ！ 怪しいお店では、決してないので―」

私は、笑顔を作つて、腕で店を示す。

こういった勧誘や接客は、社交界での経験が生きそうだ。

しかし、その男の人はまだ躊躇つているようだ。

「かなりお若いんですけど、店主さんですよね。あ、あの、一つだけ聞いてもいいですか？」

「はい、店主ですよ。なんなりと、どうぞ！」

「……超お得料理って、一体どんなものが……？」

あー、その段階から？

思わず、おでこをペシッと叩きたくなる。

たしかに、あまり『お得』を売りにすると、逆に質素なごはんが出てくるんじやないかと不安になるかも。

「そのあたりは、食べていただければわかりますよ。お代が安くとも、きっとご満足いただけます。お昼はなんと五百エリンからです」

「五百!? そ、それはたしかに格安ですね」

そうでしょうとも。

このあたりのお昼の相場が八百エリン程度であることは、調べ済みだ。

五百エリンは、この国・ベルク王国の通貨にしたらワンコイン。それでもお客様がある程度来れば、十分に利益は出せるはずだ。損得勘定は、得意中の得意と胸を張れる。どうせ夢の料理屋をやるのなら、できるだけ多くの人に食べてもらいたい。

その思いから、かなり安めの設定にしたのだ。

「さ、さ！ 中へどうぞ。色々なものを取り揃えますよ。あつさりなら、卵と香味豚の
おろしパスタ！ お洒落にいくなら、バジルピザもあります。あ。がつりいきたい
なら、ローストチキンなんでもの……」

色々とレパートリーはあるから、メニューは日替わりでやるつもりだ。

今日は初日ということで、この国の人なら誰にとつても馴染み深いだろうものを選んだ。

「は、入りますから！ 頬が、ち、近いです、店主さん、ひいつ」「……あ」

私ったら、また失態である。

売り込みたい気持ちから、つい先走ってしまった。

なぜか顔を赤くしつつも、その人は私のあとについて入店してくれる。

注文されたのは、卵と香味豚の^{こうみぶた}おろしパスタだった。聞けば、一家全員、卵料理には目がないのだとか。

このメニューも、もちろん原価は抑えて作ってある。

豚は、安い部分を仕入れた細切れ肉だし、全体の嵩^{かた}を増やすのは、キヤベツだ。パス^{かた}を茹でている鍋に時間差で投入することで行程を減らす工夫も凝らした。

茹で汁も無駄にはせず、それをもとにパスタソースを作る。

味の決め手は、最後にかける香味だれだ。

味見をしたモモが自慢げに鼻を鳴らす。

「うん、お酢の悪いところが出てない。いい塩梅^{あじまい}になつたよ。さすがボクだね」「も、モモ！ 話すのはいいけど、少し控えめに喋^{しゃべ}つてよね」

お客様に見つかつたら犬が話していると驚かれるばかりか、精霊を召喚していることから私の身分が貴族とばれてしまう可能性もある。

私はモモを背中に隠しつつ、野菜のみじん切りをオリーブオイルでじっくり炒めていく。最後に調味料と混ぜ合わせれば、もう完成！

色味も鮮やかで、香辛料がかぐわしい一品である。

付け合わせは、ポテトのポタージュと、キャベツの酢漬け。朝、私が食べたじやがいもは、このスープを作った際の余りだ。

やっぱり節約の基本は、残り物を無駄にしないことよね！

さて、反応のほどは…………

「えつ、あの、どうされました？」

お客様は一口食べると、雷に打たれたかのようにびくっと身体を震わせ、その後フォークをくわえたまま、固まってしまった。長い沈黙のあと、ぎゅうっと目を瞑つぶる

り――

「革命的に美味いっ！」

野生動物さえ逃げ出しそうな魂の叫び。

さつきまでモジモジしていたのに、人が変わったかのよう。

どうやら喜んでいただけたようで、私はほっと胸を撫で下ろす。

「舌にパスタが吸い付いてくる、この感覚、味わったことがありませんっ」尋常ならざる熱の入り方に、ややおののくが、嬉しい言葉には違いない。

「自家製麺なんです。水を加えずに、伸ばしてあるんですよ」

